

119 誌上発表

華佗の治療にみる夾脊穴の運用

周防 一平, 小曾戸 洋, 天野 陽介

北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究所

華佗、字は元化、沛国の譙の人で、紀元2～3世紀初頭、後漢時代の名医である。養性の術に通曉し、薬の処方にも精通していた。鍼灸にも造詣が深く、1, 2穴の治療で病はすぐに治った。鍼や薬で治療出来ない場合は、麻沸散を用いた全身麻酔下の外科手術を行った。曹操に重用されたが、士人であるにも関わらず、医者としてしか扱われなかったことに不満を抱き、妻の病と偽り、出仕を拒んだため処刑された。

夾脊穴は、その華佗の名を取り、華佗夾脊ともいわれる。本穴について、わが国の鍼灸専門学校の教科書『新版 経絡経穴概論』(医道の日本, 2009)には次のように記載されている。

「夾脊 別名：華佗夾脊

取り方 背部、第1胸椎棘突起から第5腰椎棘突起までで、それぞれの棘突起下縁と同じ高さで、後正中線の両外方5分を取る。*左右各17穴、計34穴ある。

主治 胸腹部の慢性疾患(特に肺結核)」

現在、奇穴である夾脊穴は、腰痛、心臓神経症、坐骨神経痛、帯状疱疹痛などの治療において効果を示す穴として、主に鍼刺激による論文が発表されている。そこで本研究において、本穴の別名として名を冠される華佗がどのように治療に用いていたかということについて調査することとした。

正史『三国志』の裴松之注(429年上表)に以下の記載が認められた。

「佗別伝曰、有人病兩脚蹶、不能行、輿請佗、佗望見云、已飽針灸服藥矣、不復須看脈、更使解衣点背数十处、相去或一寸、或五寸、縦邪不相当、言灸此各十壮灸創愈即行、後灸处、夾脊一寸、上下行、端直均調、如引繩也」(和刻本正史 三国志(影印本)(二)、汲古書院、1972)

意識：華佗の別伝にこのようにある。ある人が、病のため両足が萎えて、歩くことが出来なくなった。そこで、輿に乗り、華佗のもとを訪れた。華佗は望み見て、「あなたは已に、鍼灸も投薬も飽きるほど受けています。脈を診るまでもありません」と言い、服を脱がせて、背中に数十箇所、黒い点を付けた。それぞれが、或いは一寸、或いは五寸と離れており、縦横もバラバラであった。「この印に灸を十壮ずつ据えてください。灸創が治れば、歩けるようになるでしょう」とのことであった。後々見ると、灸痕は脊を挟むこと一寸、上下に真っ直ぐ均等に並んでおり、まるで、墨繩を引いたようであった。

上記の文から読み取ることの出来る特徴として次の三点が挙げられる。①足が萎えて歩行困難となった者の治療に用いられた。②灸治療に用いられた。③治療前はバラバラであった灸点が、治癒後には綺麗に脊柱を挟んで並んでいた。

つまり本条文において本穴は、現在の主治としてよく挙げられる腰痛などに対して用いられた穴ではなく、あるいは、本穴へのアプローチは鍼の深刺による神経根、もしくはその周囲の組織に対するものではない。その意義は、灸による皮膚に対する熱刺激によって、身体全体が矯正されることにより、当初はバラバラであった穴が結果として脊柱を挟む形で整列した、ということである。このことから本穴の運用法には、現在主に用いられている脊柱の際に鍼を用いて刺激を加えるものばかりではなく、身体に歪みのある患者に対し、その反応点を探し灸治療を加えるという運用法があったと考えられる。

なお、夾脊穴は『素問』繆刺論が出典として挙げられることも多く、ここでは「拘攣背急、引脇而痛」に対しての刺法として記されている。また華佗法とされる夾脊穴については、今回検討した裴松之注と同文が『医説』に引かれるほか、『医心方』巻2には「華佗鍼灸経」を引用し「挟脊相去一寸」の諸穴が記載され、あるいは、上記の裴松之注とは別法の夾脊穴(華佗法)が『肘後備急方』『千金翼方』に記載されている。